

本当に人気者？

「それでは木曜日は英語でなんと言うでしょう。」

「はい、テンプラ揚げてフライデーです。」

「正解はサーズデーです。」

「オーマイガッド。」

それを聞いたクラスのみんなは大爆笑で、午後の少し眠たい授業が一気に盛り上がった。

健二は、いつもおもしろいことを言ってみんなを笑わせるクラスのムードメーカー的な存在だ。勉強はあまり得意ではなく、授業中はよく周りの友だちに教えてもらったり、何か違うことを考えてぼーっとしていたりすることもある。だからよく先生からも注意される。そのたびに、おどけた切り返しでみんなを笑わせてくれるので、だんだんみんなも健二が注意されたり、質問に答えられなかったりするのを楽しみになるようになっていた。逆にちゃんと答えられると、

「ええっ。普通やん。おもしろいわ。」

と言われたりする。そんな時も健二は、

「ごめんごめん、次な。」

と笑って答えていた。健二はいつもそんな調子だったので、授業中当てられただけで、何人かがくすくす笑い出し、クラスがざわついたりするようになった。僕も内心では、

「また始まったぞ。今日はどんなこと言ってくれるのかな。」
と期待するようになっていた。

ある日の昼休み、同じクラスの卓也と明、浩二の三人が健二を囲んで話していた。

「健二ってほんまにおもしろいよなあ。」

「そうそう、うちのクラスのアイドルやもんな。」

「なあ、なんかおもしろいこと言えや。」

卓也たちはそう言って、健二を小突き始めた。

「ええっ。ちよっとまってや。」

健二は小突かれながらも笑って答えていた。僕は、

「おっ、またギャグが出るかな。」

と思っ様子を見ていた。するとそこに、先生が通りかかって、

「どうした、何かあったのか。」

と声を掛けてきた。卓也が、

「なんでもないです。ちよっと健二とふざけているだけです。」

と言いながら健二の肩に手をまわして言った。隣の明が、

「健二はみんなのアイドルやから。」

と笑いながら言った。先生に、

「健二さん、本当か。大丈夫か。」

と聞かれ健二は、

「はい、大丈夫です。」

と、いつものおどけた調子で答えた。

その時チャイムが鳴ったので、みんな

教室に入った。



それから、ときどき同じような場面を見ることがあった。時には数人で健二を追いかけたり、押さえつけて上着を脱がそうとすることもあった。それでも健二はいつも笑顔で、「やめてえ。」と変な声で叫んで見せて、みんなを笑わせていた。

それからしばらくして健二が学校を休んだ。みんなは、

「あいつがおらんかったら、おもしろいな。」

などと口々に言っていた。その後、健二の欠席はだんだん増えていった。卓也は、

「あいつ勉強できへんから、きつとさぼってるんや。今度来たら聞いてみようか。」

と冗談っぽく言った。明も、

「きつとそうや。みんなで行ったら、何て言い訳するかな。」

と言い出した。他のみんなも、それを聞いて笑っていた。

その次の日も、健二は学校を休んだ。放課後、僕は担任の先生に呼ばれた。先生は、

「最近、健二さんよく学校休んでるでしょ。先生も昨日会ってきたんだけどね。何かあったか知らない。」

と尋ねてこられた。健二は体も元気そうだったし、みんなとも仲良く過ごしていたようなので、

「いいえ、心当たりはありません。」

と答えた。先生は、

「そう…。今日、健二さんに学級通信と社会科のプリントを届けてくれないかしら。あなたは家も近いし。それでちょっと様子を見てきてくれないかな。」

と言われた。

「いいですよ。今日は部活も休みなので行ってきます。」

と僕は引き受けた。

健二の家に着いてチャイムを鳴らすと健二が出てきた。

「大丈夫？ みんな、人気者がいなくてさみしいって。僕も君のギャグを楽しみにしてるから早く学校来てな。」

と僕は言った。何か面白い返事が返ってくるかと少し期待していたが、健二は、

「ありがとうな。そっか、人気者か…。ほんまに人気者なんかな。」

と弱々しくつぶやいて家に入っていた。その時、玄関の奥に立っていた健二のお母さんと目が合った。なんだか悲しそうな目だった。

家に帰る途中、今まで見たことのない

かっただ健二の弱々しく微笑んだ顔と、

「ほんまに人気者なんかな。」という

つぶやきが、僕の頭からずっと離れなかった。

